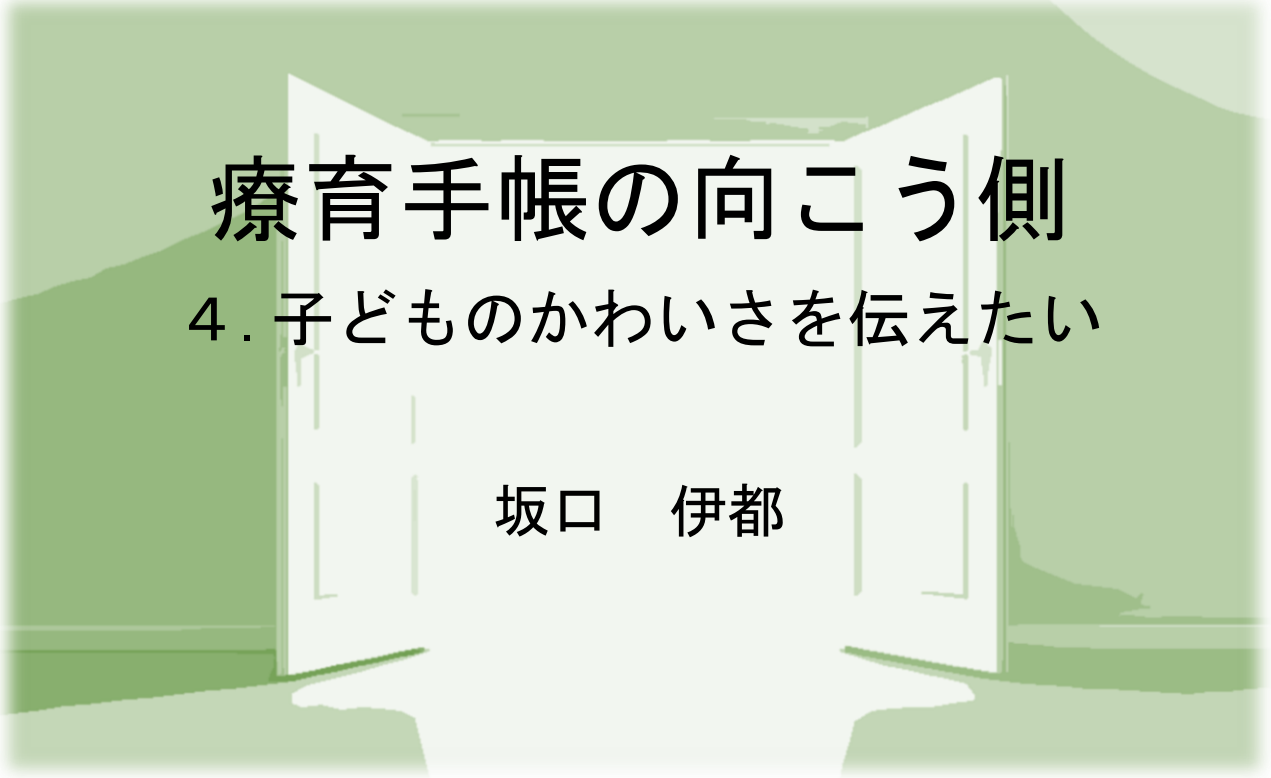




療育手帳の向こう側

4. 子どものかわいさを伝えたい

坂口 伊都

はじめに

前は、子どもとの言葉のコミュニケーションについて書きました。大人は、子どもが怒ったり泣いたりしていたらその理由を話して欲しいと願い、できるはずだと信じて「何故？」を繰り返して、子どもから言葉が出てこないでガッカリしてしまう。コミュニケーションは言葉だけではなく、仕草や表情からも伝わってくるものですが、言葉で説明できることが全てのように考え、言ってくれないと焦ってしまい、大人自身も自分の状態を言うほど上手く表現できないことが多いものです。そこは棚に上げて、子どもの心配をするのが親心というもののようなのです。

療育手帳申請の聞き取りの際、一つの質問に対して何倍も話す方もいれば、淡々と返事をする方もいます。ご両親で来られると、どちらか一方が主に対応されることが多いですが、母親に語りを譲ると言っていた父が、途中から会話に入り込み子どもの様子を熱弁することもあります。また、質問に対して、母は「できます」と言い、父は「えっ、できないだろ」と意見が分かれる時もありますが、質問内容を具体的に補足すると、お二人の着地点をみつけられます。意見が分かれたままというご両親には、お会いしたことがありません。どちらも子どもの発達検査に関心を持って来られ、子どもを思う気持ちが伝わってきます。

淡々と返事される方は、話が広がらずに終わりそうになるので、質問した側が困ってしまう時があります。例えば、「お友達関係は、どうですか？」と子どもの交友関係を尋ねると、

親 「友達は、いませんね」と一言。その後の言葉を待っても出てきそうにありません。

援助者 「えーっと、学校の様子とか何か聞いていますか？」

親 「トラブルがあったとかは聞いてないです」
援助者 「誰か、お友達の名前が出てくることはありますか？」
親 「そう言えば、最近一人の子の名前を言いますね」
援助者 「へえ、そうなのですね。いつ頃から？」
親 「この春頃からです。クラスが一緒になった子と好きなものの話をするようになってみたいで」
援助者 「何の話をしているのですか？」
親 「恐竜が好きで」
援助者 「そういえば、今日の服も恐竜柄でしたね」

その辺りから話が弾み始めます。今まで出てこなかった名前を言うようになっていく変化に気づくと、その子の成長が見えてくるようです。いつも先生の横にいて、先生とばかり話していた子が、周りにいる子を意識して、名前を覚えるまでに関心をしめしていることは、大きくて嬉しい変化です。

一緒に遊べ、お喋りをして過ごせるのが友達だと考えてしまいましたが、この子には名前を覚えた子が友達なのでしょう。「そう言えば」の辺りから、親御さんが纏っていた空気が軽やかになりました。無機質な話から感情がこもっている話に変わった印象です。淡々と答えていたのは、見知らぬ所で緊張していたのか、無口な方なのか、小さな出来事を言っても仕方がないと経験してこられたのかわかりませんが、かわいい子どもの話は楽しい気持ちにさせると教えてもらいました。今回は、親御さんから日頃の子どもの様子を聞かせてもらう中で、思わず話したくなる話題について書いていこうと思います。



困りごとから

最近のお子さんの様子を伺うと、困りごとを多く耳にします。その一つは、こだわりからくるものです。

援助者「支援学校まではスクールバスで通っているのですか？」
母 「はい、バスで」
援助者「バス停まで送っているのですか？」
母 「はい、歩いて送っています。最初にバスに乗れないと怒るので大変です」
援助者「バスが大好きなんですね」
母 「はい、バスに乗るために学校に行っているようなものです」

援助者「1番でバスに乗ったら、ご機嫌で行ってくれるのですか？」

母「1番にバスに乗れたら満足しています」

援助者「他に1番に乗らないとイヤという子はいないのですか？」

母「はい、皆さんに譲ってもらっています」

小さい子も押しのけて、最初にバスに乗ろうとすることに申し訳なさを感じていました。子どもよりも他の保護者にどう思われているかの方が気になっている様子です。この行動から苦情が出たり、嫌そうな表情をされたりもないそうです。きっと他の皆さんも「こだわり」への理解をお持ちで、温かく見守ってくれているのではないかと感じます。「こだわり」はその子の大切にしている部分で、そことどう折り合いをつけていくかを探していくことが大事になります。このお母さんには、周りの皆さんに「すみません」よりも多く「ありがとう」を伝えて欲しいと感じます。そして、1番でないと嫌という他の子が来たら、皆で知恵を絞ったらいいですし、その頃にはこの子の関心が別のところに向いているかも知れません。

次は、子どもが反抗的で困っている話です。

母「最近、家でイライラしていることが多くて、どうしたらいいものか」

援助者「いつ頃からイライラしていると感じるのですか？」

母「新学期になったぐらいからです。イライラしているから、何にイライラしているのと聞いても、自分の気持ちを上手く表現できないから、何も言わないし」

援助者「伝えたいのに伝えられなくてイーってなっている感じですかね？」

母「そうそう、そんな感じ。早くご飯食べてと言ってもグズグズして食べないし」

援助者「お父さんが言えば、動くのですか？」

母「そうですね。でも普段からいないから。そう言えば、リビングで寝るなと父が言っても、言うこと聞いてないですね」

援助者「リビングにずっといるのですか？」

母「はい、ベッドで寝てと何度も言うのですが、ソファで寝てしまっ」

援助者「自分の個室はあるのですか？」

母「はい、あります」

援助者「リビングでご家族も過ごしていますか？」

母「はい」

援助者「自分の部屋から出てこない話はよく聞きますが、〇〇さんはリビングにいたいのですね」

母「あっ、本当だ。言われてみればそうですね、気づかなかったです」

学校では反抗的ではないが両親の言う事をきかなくなった、反抗的になってと心配されていましたが、よく話を聞いていると自分の部屋があるにも関わらず、リビングに居続けているそうです。自分の部屋にはあまり行こうとしない理由を考えたくありません。親に言われたことをすぐにしなくても、家族を感じていられる距離にいたいのかも知れません。反抗的が加速していったらどうな

るのか不安を感じていましたが、違う角度から見たら違って見えてきたようで、「押してダメなら引いてみてもいいかもしれませんね」と笑っていました。

周りからどう見られているのだろう、陰口を言われているのではないか、反抗に歯止めがきかなくなっていくのではないかと等、不安になると悪い方に考えてしまいがちです。親御さんは、子どもの困りごとを話していましたが、その中には子どもの好きなものがありました。最初の子はバスが大好きで、反抗的な子は人や家族です。子どもの様子を伺っている時、普段の子どもの様子が浮かばない時や困りごとの話ばかりになる時は、気分転換も兼ねて「お子さんが好きなことは何ですか？」とお聞きしています。

「そうですね、ブロックとか作ることが好きですかね」

「何を作っていることが多いのですか？」

「食卓の上にビルや家、駐車場を作るんです。ご飯だからどけてと言っても動かなくて」

「それは、大作ですね」

「ええ。親が片付けるのですが、また同じものを作っています」

「ブロック大好きなのですね」

子どもの好きなものの話が始めると、その子がワクワクしながらやっている姿が立ち上がってきます。楽しいエピソードは、親御さんの表情を穏やかにします。

子どものために

どの親御さんにとっても子どもの将来が気になります。できることなら、子どものためになるような働きかけをしたい。

「子どもの将来につながるようにできることをしてやりたいが、何をしてやればいいのか」

と聞かれることがあります。中には、

「できることが増えたら、療育手帳がなくなってくて普通級に入り、自分の足で稼げるようになるのが一番いいと思っている」

と語る方もいます。確かに、再交付の検査で「非該当」になる子もいます。その一方で、クラスの皆ができて自分だけできないと悩み、友達から馬鹿にされ、辛い思いをした子が支援級や支援学校に入り、わかりやすく丁寧に教えてくれるから、これから何をすればいいかがわかり、自分から進んで行動するようになり、表情も明るくなったという声も聞きます。

先のことは、誰にもわかりません。わからないから不安になり、答えはないと知りながら答えを求めたくなります。さらに、他者は自分の思い通りに動いてはくれません。子どもに良かれと思っ



て、忠告をしても、耳を貸さずに「うるさいなあ」と悪態をつかれることもあり、子育てに正しさや、これをすれば良い子に育つという方法はわかっていません。本当にあれば、誰も苦勞はしません。

数多くの子どもを見ていて、周りにいる人を信じられるようになることが力になると感じます。

そのために、その子の特性、よくわかっているところと苦手なところを知り、それに合わせた伝え方を周りにも理解してもらい、「できた」という経験を積める環境を整えていくことが大切です。療育手帳が非該当になった場合でも、できて当たり前ではなく、ケアを必要とすることは多々あります。子どもとして学校に通う期間は人生の中では短く、大人として生きていく時間の方がずっと長い。障がいのあるなしに関わらず、その人が自分なんて価値がない、ダメだ、役立たずだと思うのではなく、よく頑張っている自分を肯定して生きていたいと思っています。

私のよく知る子が、療育手帳を所持して成人になりました。その子は、グループホームに住み、障害者枠での求人応募を何度か受け、研修期間に無断欠勤をして採用されなかったということもありましたが、今は一般企業で働いています。家に着くのが20時になると愚痴を言いながらも頑張っていて通勤しています。障害年金の受給等を受け、大好きなあいみよんのファンクラブに入り、コンサートに出かけるようになりました。

この子も自分に自信がなくて、いろいろなトラブルを引き起こした経緯がありますが、今は自分の生活を成り立たせて、やわらかな雰囲気になりました。あいみよんのコンサートに行くたびに万単位でグッズを買って、商品の写真を嬉しそうに送ってきます。10年後もそれが宝物になっていればいいですが、期待薄のような気がします。危なっかしいところは幾つもありますが、同時に力強さも感じます。

障がいがあるから自分の足で立てないということはありません。周りの支えは必要ですが、社会の中で元気に生きていくことができます。周りにいる人が助けてくれると信じて生きられることが強さになるのではないのでしょうか。



親は子どもの将来のために少しでも有益なことをしてやりたいと思いますが、子どものゴールを先に決めるのではなく、子どもと一緒に試行錯誤することの方が役に立ちます。子どもが迷惑をかけているのではないかと心配する気持ちが拭えないこともわかりますが、視点を切りかえ子どもの好きな事を一緒に楽しみ、子どものかわいい部分をもっと周りに伝えていき知ってもらうことが子どもの力になるのではないのでしょうか。

ようか。